

病棟内・内観療法面接者の熟達に関する研究 —熟達面接者からのインタビューを通して—

川嶋咲世 神廣憲記

【はじめに】

当院の病棟内・内観療法は 1970 年代に導入され、近年の内観者は年間 30 人ほどである。内観面接者も現在まで変遷を経て面接者・指導者も減少傾向にある。内観面接者がその技術を習得していくプロセスは、先行研究において主に徒弟制による継承が行われてきたと記述されている一方で、指導する熟達者においても患者への関わり方にばらつきがあることが指摘され、熟達者の経験を聞き取り若手面接者のレベルに合わせる必要があると述べている。本研究は熟達者からのインタビューを通して①「どのように熟達者となるのか?」、それは②「どのような熟達者か?」を明らかにし内観面接教育システムに関する探索的検討を行う。

【方法】

筆者は社会構成主義的な立場で研究デザインを行い、その過程の中で必要と考えられた既存の理論(正統的周辺参加論)を採用した。熟達者の条件を満たし趣旨に承諾を得られた 2 名を対象に半構造化インタビューを行い IC レコーダーに録音し逐語録を作成した。分析方法は Step for Coding and Theorization(SCAT)を用いた。分析は第一筆者が行い、第二筆者と分析結果・考察を協議し信頼性と妥当性を確保した。

【結果】

①内観療法学習者は内観療法を実践する共同体<内観療法課>に参加し指導者・メンバーと出会い、<面接者の役割(能力)><葛藤や戸惑い>を経験していた。<面接者の役割>の中では標準的知識・態度・技術を学んでいた。これらの経験を通して②熟達者は<内観療法の効果・限界(治療的意味付け)><面接者としての自己(役割)><組織管理><教育・伝承>の認識の変化を語った。

【考察】

本研究の結果を踏まえ、内観面接者の教育システムについて以下に議論のポイントを提供する。第一に、内観面接者に求められるコンピテンシーの検討である。熟達者の結果においては<組織管理><教育・伝承>の語りが得られたが、対患者の内観療法の実践の場面においては必須の能力ではなく、内観療法患者数・面接者数が減少する現状においては、明示的でシンプルなコンピテンシーの設定が望まれる。また、<面接者の役割>の語りにみられるように、単なる知識や技術だけでなく学習者自身の内面的な意味づけが求められていることは他の心理療法と違う内観療法特有のことかもしれない。第二に、教育方法の再考である。徒弟制の維持が難しい状況において、今後は、現状に合わせた一定の面接者の質を担保できる標準化された教育を開発すべきであろう。例えば、上記で指摘したように、学習すべきコンピテンシーをラダーなどで明示したうえで、その目標に見合う科学的な学習方法を計画し、適切な評価方法を組み合わせるべきである。このような標準的な教育カリキュラムが整えば、面接技術の継承、面接者数の増加、面接者の質の維持に寄与するであろう。

加えて、学習者が経験しうる内観療法の意義への困惑や面接者としての自らの役割についての戸惑いについては、標準的教育カリキュラム以外の枠組みも必要かもしれない。例えば、個別ではケースを通した SV 制度、グループにおいては本研究参加者の様に内観面接経験が豊富な先輩達と、新規学習者が情報交換できるような、オンライン・コミュニティの構築の導入が考えられる。